

第六回



初夢！「元気村」産直センターの実現



今年の目標は、10年来の夢であつた平成10年10月10日10時の「元気村」産直センターのオープンです。私の今年は、この夢からスタートします。

昨年は、暗い、辛いことがたくさんありましたので、今年は、爽やかに、わくわくしてスタートしたいのです。

●産直センターの発端

千葉に戻り、雪印時代のことです。帰り道、国道沿いの大型店のD.I.Yを見て、これだ、魅力ある場を作り、お客様に逆に来てもらう時代だと直感しました。

今、日本人は世界第一位の金持ちです。土日には時間がたくさんあるのが、一般の人々です。成田山参り、銚子、十九里、成田空港ルートでもある近くのバイパスは一日平均2万台近くの通行量がありますが、大きなトイレやドライブインがありません。しかし、都心への渋滞区域に入る、一息入れたい場所なのです。ここに田舎のオアシスを作り、ひと

休みし、新鮮な農産物を買つていただきうと青写真を描いたわけです。

新しい町は、都心より50km圏内のベッドタウン化した田舎町です。私が九州へ

行った頃は6千人足らずの町が、今や2万8千人となりました。自然が豊かな町

として人気があるようです。ここに、「ふるさとキヤラバン」の公演がきっかけで、異業種による街作りのグループが生まれました。「農」だけでなく、農・工・商の異業種による「産直センター」構想の始まりです。

●異業種による産直センター

農場では、自分たちの生ゴミと畜糞と人糞を有効利用した有機質肥料をもとに、おいしく安全な農産物作りと産直に努力します。流通コスト、地球環境を組み入れた地場野菜の流通も目指します。日本で一番早い、町の自給自足体制を考えたシステムです。

このところの暖冬続き、そろそろ、大冷害、大凶作が来そうです。必ず、食料難時代は来ます。

おかしいと思いませんか。苦労したキ

ヤベツが、市場出荷で一個50円です。これが150円で売られています。くやしいです。農家を馬鹿にしていませんか。

大企業が倒産する時代ですが、農民は、どんなにいじめられてもつぶれることは

直センター手作りの原動力です。建物はお金を生まないので、リサイクルで徹底して安くあげ、異業種交流の知恵のつまつた産直センターにしたいのです。

たちで値を付け自分たちで売ろう！絶対に負けないぞ！

横道にそれましたが、私たちは将来を見据えて取り組んでいます。今は貧しくても、くじけず、明るい夢を捨てません。

山形県にレインボーパークというのがありました。都会だけが消費地ではありません。自分たちの足元、地元をもう一度見直しましょう！また、農業は地球・環境を守り、国土保全の役目も負っているんだという誇りを再認識しましょう。

●農業・農村の魅力をPR！

一番訴えたいのは、農業・農村文化、農業の素晴らしさです。農業は、「生かさず殺さず」いつの世もいじめられてきました。これからこそ、農業の良さ、農村の良さを、徹底してアピールしましょ

新海和夫

農業元雪印種苗株式会社
園芸推進室室長
宮崎研究農場長



1952年千葉県生まれ。新海農園後継者2年生。元雪印種苗株式会社宮崎研究農場長、園芸推進室室長。二科会写真部所属、第77・78回連続入選。栄町観光協会理事・審査員。都城市ウェルネス特派大使。SDA千葉教会理事。日本サクラの会・栄支部理事。家庭園芸士・樹医。千葉県印旛郡栄町四ツ谷146
☎0476(95)2801

う。日本全国で産直センターのチエーン化を考えましょう。

日本の中で、農業を真剣に守ろうとする人が数えるほどでもいいじゃないですか。「農」への誇りだけは捨てずに前へ進みましょう。「農」の素晴らしいところは、大小の差別なく、平等に経営でき、いろいろなスタイルがあることです。どのようににも変化対応でき、時間が自由で自然と共に学び、喜び、悲しむことができることです。時には、お金のこととかまわらず、経営にとらわれず、運営もできるのも農業です。それだけではあります。育てる喜び、収穫の喜び、さまざまな学びを受けられます。「健康」が支えられるのも、農業の素晴らしいです。遊び心を「農」に入れてしまえば、贅沢なアウトドアライフです。

我々の産直センターではこのような農村の機微、素晴らしさも伝えようと考えています。私たちの所は、利根川との何かわりあいから「水塚（みづか）」の文化を特に伝えたいと考えています。

個人運営ではなく、組織、仕組みを大切に、誰でも運営できるようにしていかたい。個人の力は限界があり、どうしても傲慢になりがちです。特にこの点に注意して運営していくべきな考え方です。

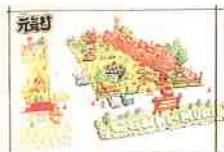
還元の方法は、地域の

社会福祉へ、日本サクラの会・栄支部へ、そして「桜」の町復活に協力させていただきます。微力ながら、農業後継者育成にも思つております。

大変偉そうな事を書きましたが、そんな思いでいます。

(有)元気村産直センター

代表者 新井清次
千葉県印西市柴原町四ツ谷146 電話: 0476(95)2801



平成16年4月1日オープンの元気村産直センター
●新規開拓地に位置する元気村の中心地です。

一、経営概況

●施設面積: 木田2500ha、田200ha
●耕種面積: 10ha
●生産作物: 水(コシヒカリ)・安心・安全・安心米(あじきまい)
江戸川区野菜(野菜は使用せず、伝統在来種の種にこだわる)
・ハクサイ(在来種栽培)、ニガウリ・タケウリ・白玉トマト、
キウイ他
●販賣種類: 農・工・商・農業による技術手作り産直センター
は大都市近郊地帯の活性化を図る、生ごみリサイクル有機肥料
による肥沃化企画、農業を推進。
産直だけでなく、市場出店と
しての有利性を強調してアピールする。

JF食材・产品フェアでの元気村の看板

●利益は社会に還元したい！

私たちのもう一つの夢は、利益の10%を社会還元し、地域社会のお役に立ちたいという「夢」です。

「農業」は無から有を生み出すものです。だからこそ、大地に社会に感謝しなければなりません。

クリスチヤンとして一生を捧げる覚悟をした私は、ただただ、自分が生かされていることに感謝し、地域の為にと思うばかりです。人は馬鹿だというかも知れませんが、私は、無力で無能ですが、ひたすら汗して働きたいところです。雪印時代よりも忙しく土日も惜しみなく働いていますが、元気に働けるのは感謝です。

産直センターも、細く長く地域に有り続けるには、必ず社会還元することです。地域に受け入れられれば、子々孫々に榮えるものと確信いたしております。

個人運営ではなく、組織、仕組みを大切に、誰でも運営できるようにしていかたい。個人の力は限界があり、どうしても傲慢になりがちです。特にこの点に注意して運営していくべきな考え方です。

全国のみなさん、大いに交流・交換しましょう。

●物々交換しませんか！

全国の産直センターの方々と連携を取り、お互いの良いものを等価交換したいと願っております。農民の物々交換です。

そうすれば、お金、税金はかからず、効率良くなればでしょう。

お米のとれない地域では私共の米を食べて下さい。あなたの地域の特異なものと交換し、販売いたします。

ただ地域に終わる事なく、消費者の人達にも喜んでいただきましょう。

人的交流も良いと思います。子供たち同士も家族同士も、ついでに産直の手伝いをしながら地域間交流し、観光、温泉

交流もいいじゃないですか。農村では、なかなか理由がないと出掛けにくいものです。農閑期を利用してもいいじゃないですか。立派なビジネス交流を理由に堂々と楽しむことをしっかりとやりましょう。日本全国気軽にやりましょう。

特に「農業経営者」の読者の方々は仲間意識が強いので実現可能です。私は「農業経営者」の読者の方々は手放しで交流できるような気がします。

全国のみなさん、大いに交流・交換しましょう。

●消費者も仲間としたい

私たちも消費者の感心な人々も仲間として参加していただこうと検討中です。

それは、ある消費者の方から一口10万円くらいなら応援するよとの声からでした。10万円なら年一回、お米一俵、野菜少々、感謝で分けてくれれば寄付しても

農産物割引となれば、ますます自分たちの産直センターとして気安い友達も紹介しやすいとのことでした。そうだ。そうなると100人会員を集めれば一千万円の投資ができます。そして消費者、お客様といいうレベルより仲間として一緒に応援してもらえ、運営できます。

新住民の方々との交流の場にもなり、顔の見える人々に食べていただける喜びも湧いて参ります。

●正々堂々と！

このように張り切っていますと、喜ばしいことばかりはありません。農村特有の足ひっぱりです。

計画を一生懸命練れば練るほどに、やつかみと邪魔が入りだすということです。田舎で言う「出る杭は打たれる」というやつです。

「根回しの新海」でも、なかなかうまく行かぬこと。これから予想されます。しかし何事もそうですが、行動してみないと前へ進みませんし、実現しません。

ひるんでもおりません。正々堂々、前に進むしかありません。いよいよ出資金による「元気村」産直センターの法人化からスタートです。

この先、正直なところ、たくさんの障害があり、10月10日にオープンできるかはお約束できませんが、これだけは念じて前に進みたいと思っています。

「あきらめない限り」失敗でない！

全国のみなさん、どうか仲間として応援してください。農村の中にはいろいろなことがあります。押し潰されないよう謙虚に地道に努力する覚悟です。